

お父様の性処理養女



小説モーメント

「それでは、これで手続きはすべて終わりです」
養護施設の園長は書類をまとめると、琴音の新しい里親、高槻に渡した。

「琴音ちゃんこの方が今日から、あなたのお父さんよ」

「はい・・・」

暗い表情の琴音は園長に引っ張られ、高槻の前に出る。

「高槻様は学園にいったい、お金を寄付して下さるとても素敵な人な

の。ちゃんとお父さんの言うことをきいて良い子にね。」
琴音は今年で〇歳になる少女。今日からこの高槻という大柄な男の養子になることになったのだ。

「はい・・・」

琴音は涙を浮かべながら答える。先ほどまで同じ園の仲間と別れの挨拶をしたばかりで気を落としていた。

「よろしく願います。おじ様」

高槻はニヤリと笑う。

「ああ、こちらこそよろしく頼むよ。しかし君は本当に可愛らしいねえ。まるで天使みたいだ」

琴音は顔を赤らめる。

「……そんなことないです……」

琴音はうつむく。

「ほら顔を上げてこっちを見てごらん」

琴音は高槻を見る。

高槻は琴音の顔を舐め回すように見る。

（ああっ！なんて美しいんだ！この小さな唇が私のものをくわえさせると思うだけで興奮する！）

「聞くまで無いと思うが、琴音は処女なんだろうね？」

「勿論ですよ、父親から虐待され処女を散らされる子もいますが琴音の処女は確認済みです」

平然と園長は応えた。

「くくく、嬉しいねえ」

そう言いながら、高槻は琴音の小さな体を触る。

胸の辺りを石けんの泡を指で尖らすように摘まむ。

「んん！」

「やっぱり、女はこの年頃が一番だ」

高槻はだらしのない顔で琴音を観察した。

「さあ、私達の家に戻ろうな・・・」

男は少女の背中に手を回す。

そして、その日の内に里親、高槻という男の養子になった琴音。

「いいかい？琴音。今日からは私の事はお父様と呼びなさい。いいね？」

「はい・・・お父様」

ようやく屋敷に着いた頃には夕暮れ時になっていた。

「今日から、ここが君の新しいお家だよ。嬉しいだろ？」

「……はい」

琴音は小さく答える。

「ふっ、これから一緒に暮らせるぞお」

門から建物まで結構離れており、庭は綺麗に剪定されている。それは男の財力を示していた。

屋敷に着き、自分の部屋に通された琴音。

初めて来る大きな家の中を見渡す。壁紙や家具はかなり高級そうなのでそろえられていた。